

# 哀 悼

平成26年度総会案内の返信ハガキなどにより、次の方たちのご逝去の連絡がありましたので、ご報告いたします。

ご逝去者	卒年科	ご逝去日
加藤 勇一	昭和16年電気科卒	2014年10月14日
伊藤 亮三	昭和27年土木科卒	2010年 1月27日
小玉 八男	昭和29年工業化学科卒	2013年12月
太田 光重	昭和31年機械科卒	2014年12月17日 (本部同窓会 前会長)
中澤 康行	昭和31年機械科卒	2011年
斉藤 晴美	昭和36年冶金卒	2014年 3月 3日
八柳 弘	昭和36年建築科卒	
中村 新三	昭和39年電気科卒	2014年 1月
小池 栄一	昭和56年機械科卒	2013年 7月 1日

心よりご冥福をお祈りいたします。



## 編集後記

昨年は母校の創立110周年で、東京秋工会から多くの同窓生が秋田で行われた記念式典・祝賀会や記念ゴルフコンペなどに出席して頂いた。私が母校に入学したのが50年前の1965年(昭和40年)なので、その時は母校創立61年であったと思う。入学した時は随分歴史が長い学校と思ったが、それから50年、今年で母校は創立111周年になり「光陰矢の如し」である。私は幸いに健康に恵まれ、昨年の母校創立の110周年記念式典に参加ができ、感慨深いのを感じた。

ところで、今年は東京秋工会創立75周年に当たる。母校創立の節目の翌年が東京秋工会の節目の年になり、2年連続で節目を迎えることになる。東京秋工会の同窓生の皆様には、11月7日に行われる東京秋工会75周年の「金砂健児の集い(総会・懇親会)」には是非参加して頂き、楽しく歓談する場にしていければありがたい。

さて本号に中国・台湾訪問記として、「再来一杯茶」を寄稿した。「再来一杯茶」とは、「お茶をもう一杯ください」の意味で、これをキーワードにして文中に「再来一杯～」を挿入した。このコーナーはティーブレイク(お茶の時間=小休止)の意味合いを込めているので、気楽に読んで頂ければと思う。

編集長 嵯峨 良平 (S43E)

金砂21号から新設された「時代に足跡を記した大先輩」コーナーに、22号で掲載した「日本プロレタリア文学の祖:金子洋文」に続いて、今回「舞踏家:土方巽」を取り上げる機会を得た。土方巽の名前に最初に接したのは、東京秋工会員の先輩画家の展示会であった。先輩はカーテンで仕切った場所に裸体の土方巽の写真などを展示していた。その後も、東京秋工会のHP担当をしていると、何度か秋田の方から土方巽に関する記事が寄せられてきた。

土方巽を始祖とする暗黒舞踏は、前衛舞踏の形式で、剃髪、白塗り、裸体で踊ることから当初は異端と評価されたが、土方から影響を受けた弟子たちの海外での公演活動が認められ、その後Butohとして逆輸入され日本でも認められた。私自身も、前衛音楽、前衛画家などおおよそ前衛とつくものに共感できる感覚を持ち合わせてなく、美術館などでもその分野は通り過ぎていたが、今回、土方巽が大きな影響を舞踏界に与えた様々な情報に接することが出来た。

金子洋文も土方巽も秋工を卒業後は一旦、工業関係の仕事に着くが、その後文学と芸術に傾倒していく。秋工を卒業しても、工業関係以外の様々な分野で才能を発揮し、生業とした人も多く、改めて人生の長さ、多種多様な個人の能力を思った。

副編集長 赤川 均 (S41E)

微力ながら会報KANASAの作成に携わることによって、母校の動静や同窓生の活躍等をつぶさに見ることができるとはラッキーだと思っています。さらに思うことはこの会報がもっと多くの同窓生に見て楽しんでもらうにはどうしたらいいか・・・という事を考えた時、現在の情報発信(提供)誌の役割にプラスして多くの同窓生からの情報をもらい、それを掲載していく情報交換誌の役割も担っていけないかと考えています。マンネリ化しがちな編集に、ぜひとも同窓生諸氏より斬新なアイデアで“カツ!”を入れていただきたいと思います。請け負ってできないかもしれませんが、一步は前進できるものと思います。ぜひともよろしくお願い致します。

副編集長 伊藤 幹夫 (S46A)

副編集長とは名ばかりで会報KANASA編集にほとんど携っていないばかりか、他の編集者の皆さんに負担をかけているのでつくづく自分が情けなく、編集後記に掲載枠を設けてもらうのは恥ずかしい限りです。それでも自分がその時代に学んだ友人達と同窓会というツールのおかげで会えるのが楽しく、嬉しい。だから辞めたく思っても、又友人と旨い酒を飲むためにもこの会報KANASAで情報発信を手伝い、同窓の集う場所に少しでも興味を持って貰うことが出来た後輩達が訪れる事を待ちながらもう少しお手伝いしたい。

副編集長 下總 勉 (S47A)

今年は東京秋工会創立75周年。私が初めて東京秋工会の総会に出席したのは、フリーのデザイン屋として独立した翌々年のこと。その時31才で、今年3月で満60才だから、私的にも東京秋工会との関わり30年目、という記念的(?)区切りの年になるなあ・・・などと、もっともっと関わりの長い先輩たちのことはさておき、何やら手前勝手な感慨を覚えている。

6月のこと。奇遇に奇遇が重なり、昭和48年卒業の同期が集まることになった。土木科卒の同期が急に来れなくなり、結局その日集まったのは機械科卒の5人。MAが2人、MBが3人という具合。セッティングを全て任されてしまっちょっと面倒な感じがなくもなかったが、その日が来て、皆と会った瞬間、そんな思いはどこへやら……。長いこと同窓会の幹事をやっていたが、同期・同級と会える機会はほとんどないに等しかった。同窓の先輩方には何かと親しくつきあっていただいているが、同期・同級はやはり別物、ということ改めて感じた日だった。

そんなあいつらが、今年は総会・懇親会に来てくれるという。なんとというか、単純に嬉しい。

副編集長 船木 一美 (S48M)